

2025

とちぎの “食と農”

栃木県の農業・農村の概要

誇れる「ふるさと」を次の世代へ！



栃木県

とちぎの“食と農”

栃木県の農業・農村の概要 2025年度版



【1位 米】



【3位 鶏卵】



【5位 いちご】



【7位 もやし】

目次

- とちぎの農業のすがた ······ 1
 - ・農業生産の動向
 - ・担い手の動向
 - ・農地の動向
- とちぎ自慢の農産物 ······ 2
 - ・主要な農産物一覧
 - ・米・麦・大豆
 - ・野菜・特産・果樹・花
 - ・畜産
- 栃木県農政の基本方針と重点戦略 ······ 5
- 栃木県農政部の組織と仕事 ······ 7
- 栃木県の品種・技術開発の取組 ······ 8
 - ・とちぎの農業関係試験研究機関
 - ・オリジナル品種の開発
 - ・新技術の活用



【2位 生乳】



【4位 豚】



【6位 肉用牛】



【8位 トマト】



【9位 なし】



【10位 にら】

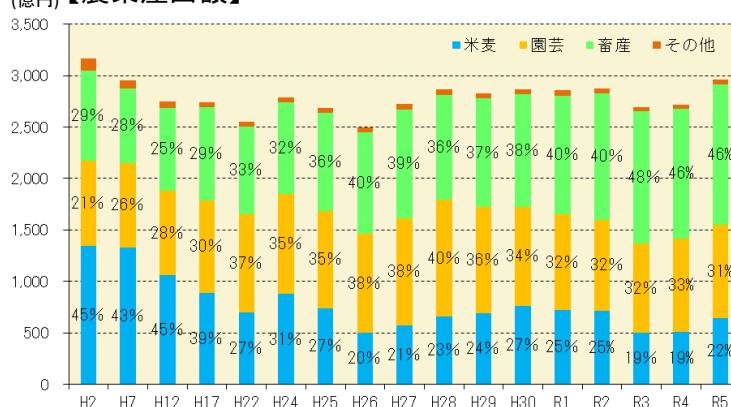
令和5年農業産出額 県内上位10品目

とちぎの農業のすがた

農業生産の動向

- 栃木県は大消費地である首都圏に位置し、平坦で広い農地、豊富な水資源、穏やかな気候など、農業に適した条件に恵まれています。
- これらの条件と農業者の優れた技術によって、日本一のいちごをはじめ、米、生乳、にらなど、全国に誇れる多彩な農産物が生産されています。
- 栃木県の令和5年の農業産出額は2,959億円、全国順位は10位となっています。

【農業産出額】



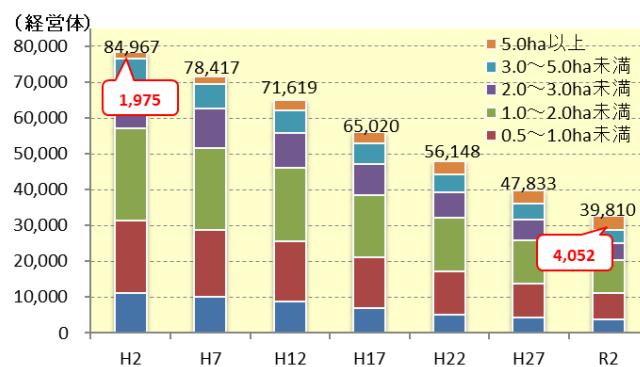
【とちぎの農産物産出額ベスト10】

順位	農産物	産出額(億円)	構成比(%)	全国順位
1	米	586	19.8	8
2	生乳	435	14.7	2
3	鶏卵	348	11.8	7
4	豚	279	9.4	10
5	いちご	277	9.4	1
6	肉用牛	251	8.5	6
7	もやし	106	3.6	1
8	トマト	78	2.6	8
9	なし	53	1.8	4
10	にら	49	1.7	2

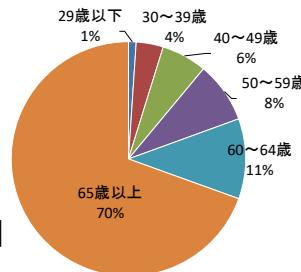
担い手の動向

- 農業経営体数は年々減少し、30年前の約4割となっており、基幹的農業従事者のうち約7割を65歳以上が占めています。
- 一方で、経営面積5ha以上の経営体は30年前の約2倍となるなど、経営の大規模化が進んでいます。
- 令和6年度は、363名の新規就農者を確保し、平成27年度から10年連続で300名を超えていました。

【経営耕地面積規模別農業経営体数の推移】 農林業センサス



【基幹的農業従事者の年齢別割合】



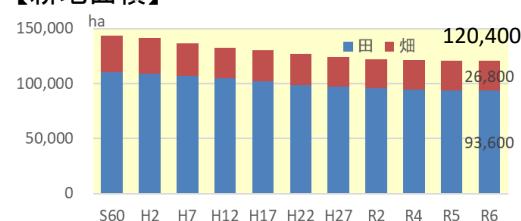
【新規就農者数】



農地の動向

- 耕地面積約12万haのうち、田の面積が約78%を占めています。

【耕地面積】



とちぎ自豪の農産物

主要な農産物一覧



いちご

栃木県は、生産量が半世紀以上にわたり日本一の「いちご王国」。

「とちあいか」は、作付面積が県全体の8割を超える主力品種です。



うど

独特の味と香り、歯ざわりが魅力のうど。

穂先は天ぷら、皮はきんぴら、茎は酢の物など、余すところなく食べられる優れものです。



かんぴょう

300年以上前に栽培が始まり、生産量が全国の99%以上を占める特産物。

原料のゆうがおは新たな食材としても活用されています。



麻

栃木県で作られる精麻は「野州麻」と呼ばれ、強度があり、利用価値が高いと言われています。

伊勢神宮のしめ縄にも使われています。



二条大麦

県内全域で生産される二条大麦は、ビールやお菓子などの原料になります。

そのうち、ビールの原料となる「ビール大麦」の収穫量は全国1位です。



生乳

冷涼な県北地域を中心に乳用牛が飼育されています。

牛乳には、たんぱく質やカルシウムが豊富に含まれています。



にら

県内全域で生産され、1年を通して出荷されています。

県オリジナル品種「ゆめみどり」の作付面積が拡大しています。



米・麦・大豆

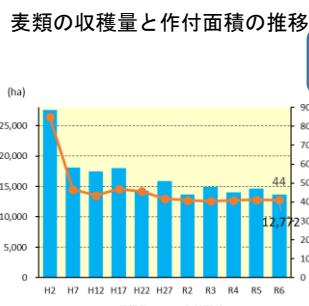
- 豊かな水資源と広大な水田からコシヒカリを中心としたおいしい「栃木米」が生産されています。
- 子どもたちがおいしい「栃木米」を味わえるよう、学校給食には、全量県産米が使用されています。
- 本県オリジナルの米「とちぎの星」は高温耐性に優れ、近年の夏の猛暑の影響から作付が拡大しています。

※収穫量の全国順位

米(全国第8位※)



ビール大麦(全国第1位※)



大豆(全国第14位※)

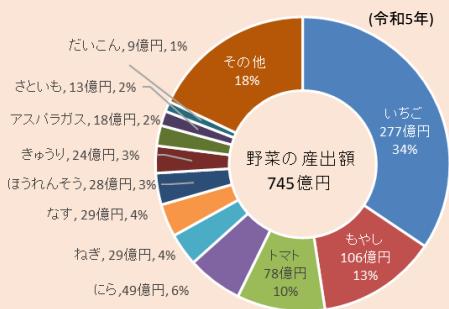


野菜・特産

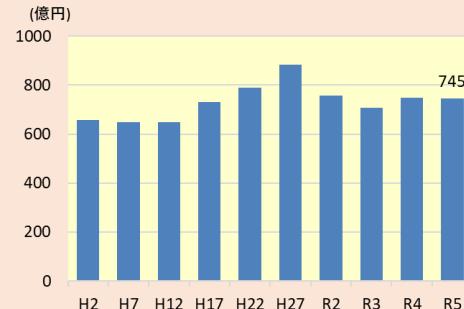
- 半世紀以上にわたり生産量が日本一のいちごをはじめ、トマト、にら、アスパラガス、なすなど多彩な野菜が生産されています。
- とちぎの新鮮な味を、1年を通してより多くの食卓に届けるため、最新の生産施設や出荷施設の整備を進めています。
- 収穫量全国第1位のかんぴょう、うど、あさ、第2位のあゆなど、地域の自然や風土に根ざした特産物が生産されています。

※収穫量の全国順位

野菜の品目別産出額割合



野菜の産出額の推移



いちご(全国第1位※)



25,700トン
(R6)

県民1人当たり
約48パック分
(1パック約280g)

トマト(全国第5位※)



29,000トン
(R6)

県民1人当たり
約126個分
(1個約120g)

にら(全国第2位※)



8,060トン
(R6)

県民1人当たり
約42束分
(1束約100g)

かんぴょう(全国第1位※)



167トン
(R6)

地球をかんぴょう
で巻くと
地球約1周分

あゆ(全国第2位※)



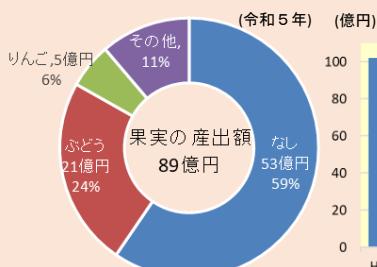
292トン
(R5)

一列に並べると
宇都宮市から福岡市
まで届きます

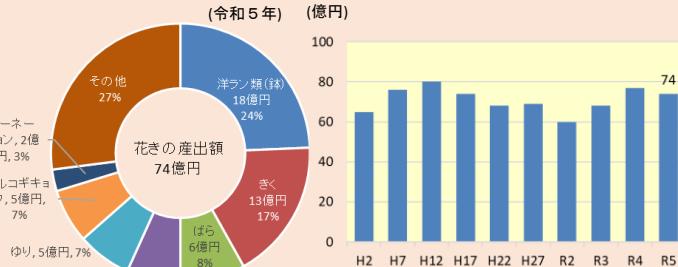
果樹・花

- 本県の果樹は、なしとぶどうが多く生産されており、県の果実産出額の8割以上を占めています。
- 特に、なしは収穫量全国第4位で、甘くてみずみずしい「幸水」や「豊水」、さらには本県オリジナル品種「にっこり」が生産されており、輸出も行われています。
- 花では、きく、ばら、ゆり、トルコギキョウ、シクラメン、洋らんなど、四季折々の多彩な花が生産されています。

果実の品目別産出額割合、産出額の推移



花の品目別産出額割合、産出額の推移



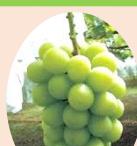
なし(全国第4位※)



17,100トン
(R6)

県民1人当たり
約30個分
(1個約300g)

ぶどう(全国第21位※)



1,490トン
(R2)

県民1人当たり
約3房分
(1個約300g)

きく(切り花)(全国第10位※)



2,220万本
(R6)

県民1人当たり
約12本分

鉢物類(全国第12位※)



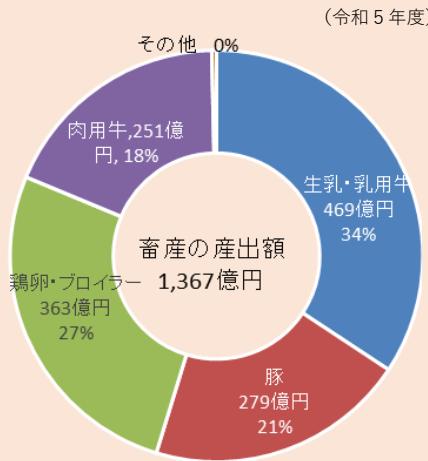
312万鉢
(R6)

県民1人当たり
約2鉢分

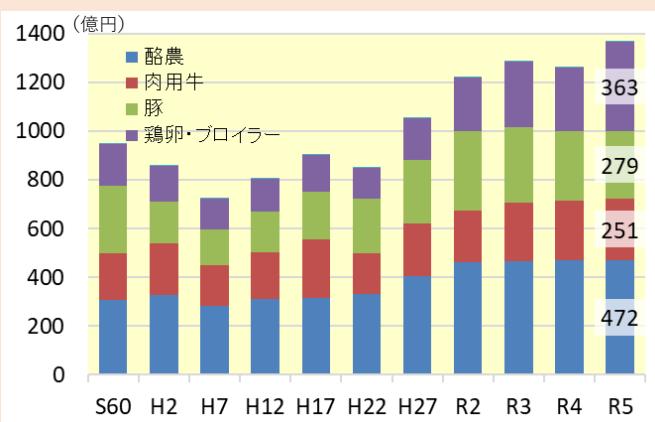
畜産

- 産出額は、乳用牛が全国第2位、肉用牛が全国第6位であるなど、全国有数の畜産県です。
- また、畜産物の産出額は増加傾向であり、本県の農業産出額の約4割を占めています。
- 牛肉は、アメリカやシンガポール、EUなどへの輸出も行われています。

畜産物の品目別産出額割合



畜産物の産出額の推移



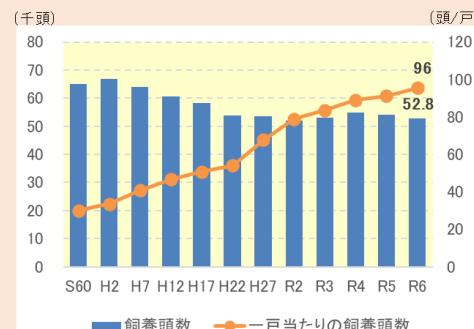
生乳(全国第2位※)

350,055トン
(R6)



県民1人当たり
牛乳パックに換算して
約913本分
(1本200ml)

乳用牛の飼養頭数の推移



12,780トン
(R6)
※精肉換算



県民1人当たり
ステーキに換算して
約33枚分
(1枚約200g)

肉用牛の飼養頭数の推移



豚肉(全国第10位※)

20,246トン
(R6)
※精肉換算



県民1人当たり
とんかつに換算して
約59枚分
(1枚180g)

豚の飼養頭数の推移



鶏卵(全国第9位※)

105,490トン
(R6)



県民1人当たり
目玉焼きに換算して
約19枚分

採卵鶏の飼養羽数の推移



栃木県農政の基本方針と重点戦略

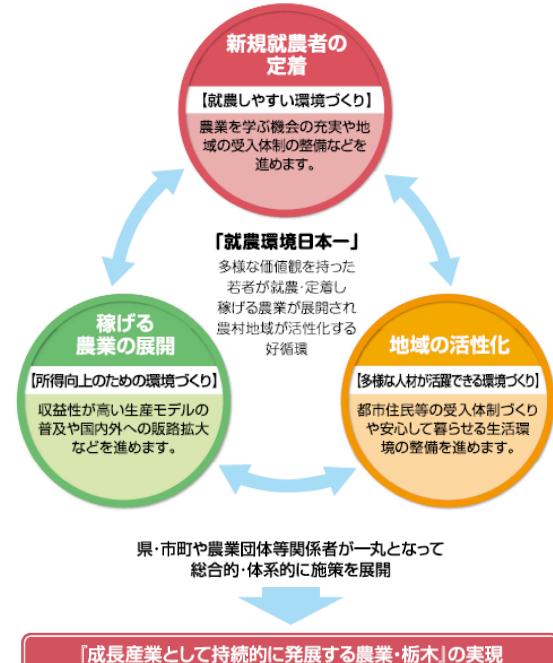


【基本目標】

多様な価値観を持った若者が就農・定着し、稼げる農業が展開され、農村地域が活性化する好循環を生み出し、「成長産業として持続的に発展する農業・栃木」の実現を目指します。

数値目標		(参考)直近値
◆農業の販売力: (販売農家1戸あたりの農業産出額)	【1,000万円】 (2024年)	【793万円】 (2018年)
◆地域農業を支える力: (青年新規就農者数)	【1,600人】 (2021-2025年)	【1,264人】 (2016-2020年)
◆地域の持続力: (担い手への農地集積率)	【80%】 (2025年)	【52.7%】 (2019年)

(出典)販売農家戸数・農業産出額:農林水産省調べ
青年新規就農者数・農地集積率:栃木県農政部調べ



【重点戦略】

基本目標の実現に向け、重点的に取り組む3つの戦略を推進しています。

戦略1: 明日へつなぐ

意欲的な若者をはじめとする多様な人材が活躍し、本県農業を力強く支え、明日へつながる農業を展開します。

①地域農業を持続的に支える仕組みづくり

高齢化などにより農家が減少する中、地域農業を持続的に支えていくため、担い手への一層の農地集積・集約や、広域的に営農を展開する法人などの新たな担い手の育成を図るとともに、多様な人材など地域の力を結集した農業の仕組みづくりを進めます。



法人組織設立に向けた當農部会での話し合い



雇用就農希望者向けの法人ツアー

②意欲ある人材の参入促進

産地が主体となった新規参入者を受け入れる新たな体制づくりを進めるとともに、農業を学ぶ機会の充実を図り、栃木で農業に取り組む多様な人材の確保・育成を進めます。



就農相談会(トチノフェア)の開催



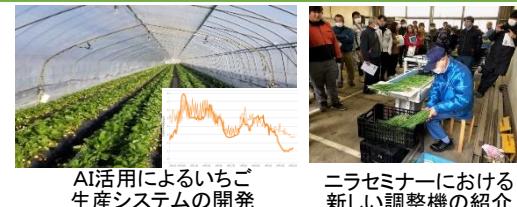
ベテラン農家「とちぎ農業マイスター」による就農希望者への研修

戦略2:強みを伸ばす

大消費地に近く、広大な水田と高い生産技術などを有する本県の強みを最大限に生かし、成長産業としての農業の更なる発展を図ります。

①新たな施設園芸の展開

AI等を活用した新たないちご生産技術の開発や、いちご、にらの高収益モデルの確立等により、施設園芸の収量や品質の飛躍的な向上を図ります。



AI活用によるいちご生産システムの開発

ニラセミナーにおける新しい調整機の紹介

②稼げる水田農業の実現

水田を活用した競争力の高い大規模園芸産地の育成を進めるとともに、先端技術の導入や団地化を進め、省力的で効率的な稻・麦・大豆の生産体制を確立します。



キャベツの機械収穫

水管理システムを導入した基盤整備

③栃木の畜産力強化に向けた展開

本県畜産の産出額拡大を目指し、担い手の確保と経営形態の多様化を図るとともに、AI・IoTの活用や家畜伝染病対策等の推進による生産性・ブランド力の向上に取り組み、経営力及び生産・販売力を高めていきます。



餌寄せロボット

耕種農家と畜産農家の連携による飼料生産

④“選ばれる栃木の農産物”の実現

「いちご王国・栃木」を最大限に生かしてブランド発信力を強化するとともに、オリジナル品種のブランド価値の深化を図り、国内外で「選ばれる栃木の農産物」の実現を目指します。



関西圏でのいちご王国マルシェの様子

台湾での県産農産物PRの様子

⑤次代を見据えた研究開発の推進

本県農業の顔となるオリジナル品種や生産性の高い新技術の開発を進めるとともに、気候変動や温室効果ガス排出削減など環境の変化や時代のニーズに適応した農業技術の開発・普及により、本県農業のイノベーションを促進します。



高温耐性品種開発に向けた手まり咲きの県オリジナル品種試験の様子

戦略3:呼び込み・拓く

新しい人の流れの創出による農村地域の活性化と安全・安心で住みよい農村づくりを進めます。

①新しい人の流れの創出による農村地域の活性化

農村資源を活用した都市住民等の交流人口の拡大、将来的な移住・定住につながる農村における関係人口の創出・拡大に向けた取組を推進するとともに、農村地域の将来を担う多様な人材の定着を促進し、新しい人の流れの創出による農村地域の活性化を図ります。



農村プロデューサーによる伴走支援

農家民宿での調理体験(FAMツアー)

②安全・安心なとちぎの農村づくり

農地や農業水利施設などの農業生産基盤の整備や管理により、良好な営農条件を備えた優良農地を確保するとともに、農村地域の防災・減災力の強化と安全性に配慮した次世代型の農村環境の整備に取り組むなど、安全・安心で住みよい農村づくりを進めます。



ほ場整備後の畑地帯

田んぼダム排水マス設置中の様子

栃木県の品種・技術開発の取組

とちぎの農業関係試験研究機関

■ 農業関係の4試験研究機関が、「栃木県農業試験研究推進計画」に基づき、効果的・効率的な試験研究に取り組んでいます。

【農業試験研究の重点テーマ】

- 1 栃木のブランド力を高める農産物の開発
- 2 気候変動等の環境変化に適応した生産技術の開発
- 3 生産力向上や省力化を実現する革新的な技術の開発
- 4 農産物の新たな価値を創出する技術の開発
- 5 地域の活力や魅力向上につながる技術の開発

◆畜産酪農研究センター

乳用牛、肉用牛及び豚の生産技術や畜産環境保全技術の研究開発を行っています。

◆県央家畜保健衛生所（家畜衛生研究部）

家畜疾病の診断・予防技術の研究開発を行っています。

◆農業総合研究センター

○本場

農作物の生産技術の研究開発や、新品種の開発を行っています。

○いちご研究所

全国唯一のいちご専門の公設研究機関。いちごの新品種開発や高品質超多収技術に関する研究開発を行っています。

◆水産試験場

本県特産魚の生産技術の研究開発や、水域生態系の調査・研究を行っています。

オリジナル品種の開発

■ 県試験研究機関では、消費者ニーズや農業者からの期待に応えるため、いちごや水稻をはじめ、なしや花きなどのオリジナル品種を、優れた育種技術により次々と開発しています。

いちご「とちあいか」



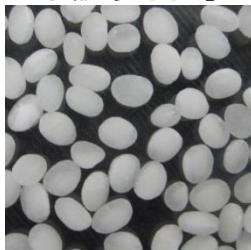
□ 品種登録 令和6年6月

□ 主な特徴

- ・酸味が少なく際立つ甘さ。
- ・収穫始めが10月下旬と早く、収穫量が多い。
- ・切り口はへた部分がくぼむハート型である。

□ 生産状況 令和7年産 397.1ha

水稻「夢さらら」



□ 品種登録

令和4年2月

□ 主な特徴

- ・心白がはっきりしていて日本酒造りに適する。
- ・玄米を削る際にも砕けにくいため、大吟醸酒の製造に向く。
- ・稻が倒れにくく、病気に強い。

□ 品種登録 令和6年6月

□ 主な特徴

- ・果実が白い。
- ・まろやかな食感のいちご。
- ・果実は大きいものが多く、収量性に優れる。

□ 生産状況 令和7年産 2.6ha

大麦「もち絹香」



□ 品種登録

令和4年2月

□ 主な特徴

- ・弾力のある食感
- ・麦飯特有の不快な臭いが発生しにくい。
- ・炊飯後も褐変しにくい。

(写真は炊飯24時間後)

にら「ゆめみどり」



□ 品種登録 平成29年2月

□ 主な特徴

- ・生育が旺盛で多収。
- ・収穫を重ねても葉幅の低下が少なく、品質が安定している。

□ 生産状況: 40.1ha (令和6年産)

大麦「ニューサチホゴールデン」



全雌三倍体サクラマス 「銀桜サーモン」



□ 品種登録 平成30年2月

□ 主な特徴

- ・ビールの品質を低下させる酵素の一一種(Lox-1)を含まない。
- ・その他の特性はサチホゴールデン同様で、栽培性に優れる。

□ 生産状況: 7,689ha (令和6年産)

□ 商標登録 令和4年3月

□ 主な特徴

- ・大型(全長約50cm)に成長する。
- ・銀色に輝き、姿、色が美しい。
- ・引きが強く、釣り味が良い。

□ 取扱い管理釣り場

令和7年1月時点: 8箇所

あじさい「キャンディポップ」



□ 出願公表
令和5年3月

□ 主な特徴
・八重咲きのがくあじさいで、花色は深みのある濃いピンク色で赤いふちどりが入る。



□ 出願公表
令和5年3月

□ 主な特徴
・八重咲きのがくあじさいで、花色は白から淡いピンク色で赤いふちどりが入る。



□ 出願公表
令和5年3月

□ 主な特徴
・八重咲きのてまりあじさいで、花色は白から淡いピンク色で赤いふちどりが入る。

現在登録されている栃木県育成の品種数 (令和7年10月末日時点)

※出願公表品種を含む

品目	水稻	麦	いちご	なし	かぼちゃ	うど	あじさい	りんどう	にら	その他	計
品種数	4(5)	6(12)	5(10)	2(3)	(1)	2	7	2	1(3)	2(16)	31(61)

※ () 内はこれまで登録した品種数

新技術の活用

■ 乳牛の新たな暑熱対策技術「SLICK牛」

近年、夏場の気温上昇が顕著になり、乳用牛の乳量や繁殖性に悪影響を与えることが懸念されています。夏場の暑熱対策としては、扇風機の設置など畜舎の改善や、添加資材の給与などに取り組まれてきました。しかし、今後、ますます暑熱の影響が大きくなると考えられることから、畜産酪農研究センターでは、暑熱耐性の高いSLICK遺伝子を導入した乳牛自身の耐暑能力の向上に取り組んでいます。

この牛は、被毛が短い特徴をもち体温調節能力が高いため、夏季でも安定した生乳生産を維持できる可能性をもっています。

今後、SLICK遺伝子を持つ牛がどの程度暑さに強いのかを確認するため、食欲や乳量への影響等を調査していきます。



令和7年産とちあいかの作付面積が初めて8割を超える ～「大切な人にいちごを贈ろう運動」で県産いちごの魅力を発信～



キャンペーンの啓発ポスター

「とちあいか」の主力品種への大転換等を進めてきた結果、令和7年産とちあいかの作付面積(JAグループ分)は8割を超えました(全農とちぎ調べ)。

令和7年に策定した新戦略に基づき、「とちあいか」のポテンシャルを最大限に引き出し、世界に誇る「いちご王国・栃木」の実現を目指します。

また、県民のいちご愛を育むとともに、県内外の消費者に県産いちごの美味しさを知ってもらうため、「大切な人にいちごを贈ろう運動」キャンペーンを実施し、全国47都道府県に本県のいちごを届けました。

今後も、切り替えが進むとちあいかの品質向上等に取り組むとともに、多くの方に県産いちごの魅力を届けていきます。

農村地域におけるインバウンドの受入れ推進に向けた キックオフ・シンポジウムを開催

県域でインバウンドの受入れに取り組む機運を醸成するため、今回のシンポジウムでは「農村地域におけるインバウンドの受入れの推進」をテーマに、インバウンドをめぐる最新情勢や県内のトップランナーの受入事例を共有するとともに、県から新たに策定した「とちぎの農村地域グローバルビジネス推進方針」を報告しました。

参加者からは「今後のインバウンドの受入れに向けて参考となる内容だった」といった声が聞かれ、県内農村地域へのインバウンドの受入れ推進につながるシンポジウムとなりました。



県内先進事例の発表